

Desbordes-Valmore の表象

——涙——

饗 庭 千代子

I

Sur la terre où sonne l'heure,
Tout pleure, ah! mon Dieu! tout pleure.

(texte, p. 507)

これは19世紀初頭の閨秀詩人, Marceline Desbordes-Valmore (1786—1859) の未刊詩集に収められている一篇 《LES CLOCHES ET LES LARMES》 (鐘と涙) の一節である。この2行がリフレーンとして用いられてこの詩全体の主調となっているのだが、これはそのまま彼女の *poésie* そのものにおけるリフレーンと考えることができる。〈pleurer〉という言葉が、「泣く」という現象を誘発する *mal*, *malheur*, *tristesse*, *souffrance* といった彼女の詩情の源泉を暗示しているからである。

Verlaine が「呪われた詩人達」の中に唯一人の女流詩人として Desbordes-Valmore の名を加えたのは、「その一目瞭然の、だが絶対的な暗さ⁽¹⁾」の故にであった。この「暗さ」は、まだ幼い少女の頃から73才でこの世を去るまでの長い生涯、詩人を苛み続けた外的・内的苦悩 (*souffrances*) に由来する。しかし又この苦悩こそが詩人 Desbordes-Valmore を生んだ土壌であり、*poésie* と実生活の原点となっているものである。

Desbordes-Valmore の作品や書簡において、〈pleurer〉、〈pleurs〉、或は〈larmes〉という言葉が頻繁に用いられ、又1833年に出版された詩集には《Les Pleurs》と題がつけられていることから、現実の生活において引き起される悲しみ、苦しみに対する詩人の第一の対応が、「泣く」ことであったと推察される。「泣く」こと「涙を流す」ことが詩人にとって最も馴染みの深い、感情の生理的・心理的表現様態であったと見做すことができよう。晩年、病の床にあって親友の Pauline Duchambge に宛てた手紙の中で、Lamartine の詩の一節〈Rien ne reste de nous, sinon d'avoir aimé!〉を引用し、その後半を〈……sinon d'avoir pleuré〉と置きかえて自らのエピグラフとして語ってもいる⁽⁹⁾。

「泣く」「涙を流す」現象は、表層的には哀れをそそる感傷的な印象を与える。Desbordes-Valmore が、愛に破れ、漂泊と貧苦の生涯を送り、その悲しみを涙で綴った薄幸の女流詩人という紋切型のイメージで片付けられ、時には、女の特権である涙を売り物にしたとの謗を受けてきたのはこのためである。

しかし晩年の作である《Renoncement》（抛棄）の次のような詩句を読む時、彼女の常套語である「涙」にはもっと奥行き深い意味が仮託されていることに気付かされる。

Pardonnez-moi, Seigneur, mon visage attristé,
 Vous qui l'aviez formé de sourire et de charmes ;
 Mais sous le front joyeux vous aviez mis les larmes,
 Et de vos dons, Seigneur, ce don seul m'est resté.
 C'est le moins envié, c'est le meilleur peut-être :

(ibid. p.547)

神からは〈sourire〉も〈larmes〉も授かって生まれてきたのに、自分には涙だけが残った。神からの賜りものである涙は「一番欲しくないもの、一番嫌な

もの」だと思ってきたけれど「もしかしたら一番よいもの」なのかも知れない、と今詩人には思えるのだ。Desbordes-Valmore がそこからの逃避、解放を志向し続けた「涙」つまり「苦悩」が、もしかしたら *le meilleur* だと、最上級で肯定されるに至るには、どのような内面の推移を経ているのであろうか。

同時期の作品に次のような、同様の神への語りかけが見られる。

J'irai, j'irai lui dire, au moins avec mes larmes ;
“Regardez, j'ai souffert...” il me regardera,
Et sous mes jours changés, sous mes pâleurs sans charmes,
Parce qu'il est mon père il me reconnaîtra.

(La Couronne éfeuillée, *ibid.*, p. 546)

ここでは苦悩は、詩人が唯一神に対して誇れる勲章のように輝いている。苦悩は、贖罪を果たし、認められて神の苑生に迎え入れられることを可能にするというこの確信は長い涙の時に培われたものであるのだろう。苦悩が苦しみでなくなり、涙が哀れむべきことでなくなることへの、「涙」が暗示する下降のイメージから上昇のイメージへの移行、が詩人の内面で進行していった結果であらう。

本論では初期の恋の情熱を吐露した詩から、晩年の深く内面に浸透していった抒情を歌い上げた作品に至る幾篇かのテキストを、「泣く」「涙」という用語に焦点をあてて検討し、そこに見出されるアンビバレンスを明かすことを目的としたい。

II

I 章の冒頭で引用した『鐘と涙』のリフレンとなっている2行詩は、次の

ような4行詩句の間に挿入されているものである。

L'orgue sous le sombre arceau,
Le pauvre offrant sa neuvaine,
Le prisonnier dans sa chaîne
Et l'enfant dans son berceau ;

. . .

La cloche pleure le jour
Qui va mourir sur l'église,
Et cette pleureuse assise
Qu'a-t-elle à pleurer?...L'amour.

(ibid., p. 507)

時を打つ、つまり変転を常とする現世は所詮悲しみ、苦しみに満たされているのだという諦念を、年令、性、境遇の異なった対象の多様な「泣く」行為の誘因を列挙して提示している。ここには作者の「泣く」様態は直接語られていないが、もちろん対象にすり変えられた作者の姿が影を落としている。『鐘と涙』が非常にヴァルモリアンな美しさを持つ詩だと言われているのは、女優・歌手であった詩人の天賦の音楽性と、鐘の音には特に敏感であったという独特の感受性がこの詩を調子高いものになっているからであろう。オルガンの響も鐘の音も、貧困や孤独の故に、又愛や自由を失なって、各々の異なった悲しみを泣くすすり泣きや頬を伝う涙に呼応し、救いようのない悲しみのハーモニーを奏でる。ところが〈pleurer〉という言葉は人間の暗い現実を伝えるだけで終わってはいないのである。この詩の結びとなっている2つの4行詩を引用する。

Et le ciel a répondu :
“Terre, ô terre, attendez l'heure !
J'ai dit à tout ce qui pleure,
Que tout lui sera rendu.”

Sonnez, cloches ruisselantes !
 Ruissellez, larmes brûlantes !
 Cloches qui pleurez le jour !
 Beaux yeux qui pleurez l'amour !

(ibid., p. 507)

ここでは、〈pleurer〉という言葉の繰り返しで強調されていた、課せられた運命に抗う術もなく頭を垂れている人間の弱さ、無力、哀しさが払拭されてしまっているのである。「泣き悲しむ者皆にすべてが報いられる」という信念に支えられた「涙」の肯定が結びになっている。Desbordes-Valmore の詩ではこのように否定が否定のままに終らず（その反対もあり得るが）mal と bien, doux と amer, vivre と mourir といった対立するイメージが究極的に同一化されるということがしばしば起っていることに注目したい。一篇毎の作品がそうであるだけでなく、作品全体を総合的に見た場合にもこの傾向が顕著に認められるのである。一篇の詩の中で、天と地という二つの視点から捉えられた涙が描かれている『鐘と涙』は、Desbordes-Valmore の poésie のパターンの典型だと思われるが、Ⅲ章以下で複数の詩篇を検討し、同様の、常に事象の両面を語ろうとする詩人の本能的な指向が、作品全体の流れにも認められることに言及する。

Ⅲ

Ⅲ-1

『鐘と涙』の中で「天の応答」として呈示されている詩句〈……tout lui sera reudu〉は、人間が地上で生きるといことは何かを失なうことに等しい、そして人はその度に涙を流すのだ、という人生観を踏まえたものである。

Desbordes-Valmore が詩の中で「泣く」という行為を直接的に語っている

のは、喪失、それも取り返しのつかない喪失を経験した時である。実生活での喪失の原体験となっているのは、12才で母親と共に故郷を去り、苦難の船旅の末辿り着いた西インド諸島のグアドループ島で、熱病のために母を亡くしたことだ。これは同時に、後に幾度となく詩人が内面の世界に於てそこへの回帰を試みることになる幼年時代、原初の無垢の楽園であった故郷、との訣別を意味する。以後、恋愛、職、住居、子供達、友人、といった外在するものの喪失を次々経験することになるのだが、その中で最も激しい「泣き」を引き起したのが失恋である。前章で引用した『鐘と涙』に於て、「流せ涙を」と鼓舞しているのは「恋の涙」であった。

Adieu... mon âme se déchire!

Ce mot que, dans mes pleurs, je n'ai pu prononcer,

Adieu! ma bouche encor n'oserait te le dire,

Et ma main vient de le tracer.

(ibid., p.60)

Ma sœur, il est parti! ma sœur, il m'abandonne!

Je sais qu'il m'abandonne, et j'attends, et je meurs,

Je meurs. Embrasse-moi, pleure pour moi...pardonne...

Je n'ai pas une larme, et j'ai besoin de pleurs.

(ibid., p.66)

初期のエレジーでは、引用部分に見られるような、Desbordes-Valmore 自身のわめきに近い「泣く」表現様態が直接語られている。恋人に去られた悲しみ、痛みは生を耐え難くする程までに、詩人を身体的、精神的限界に陥れている。感情が自制できない圧倒的な力をもっているために起る衝動としての「泣く」様態を書写することで、そのような苦しみ、痛みの度合いを伝えようとしたものである。

Desbordes-Valmore は非常に早熟であったと言われ、7才の時に10才の少年との間に芽生えた淡い恋の思い出を後になってうたった詩篇が残されているし、15・16才から何度かの恋愛体験もあった様である。しかしエレジーにうたわれているのは、22才の時の、詩人 Henri de Latouche との短い恋だとするのが多くの研究者達の一致するところである。不実で無情、陰湿で神経質でといった暗いイメージに包まれた男であったと言われる Latouche との恋愛は、Marceline Desbordes にとっては生涯にただ一度激しい情熱を燃やした真実の恋であり、時を経ても風化されることはなく、業となって彼女の内面でいつまでも燦り続けることになる。「私は苦しみから逃れるために書いた。人はそれをエレジーだと言う……。」と自身が言っているように、この恋愛事件は女優 Marceline を詩作へと向かわせる契機となったのである。この時彼女にとって「書く」ことは「泣く」ことに等しく、この二つの行為の間に介在しているものは何もない。

ところで Marceline がエレジーを書き始めた当時は、ロマン主義初期、Millevoye から Lamartine に至るエレジーとロマンスの全盛期で、romantisme pleurard et sentimental と言われた時代であった。「泣けば泣く程 grande ame であると持て囃され、読者にたくさん涙を流させることが、豊かな感受性、才能を証拠だてることになった⁽⁶⁾」当時の詩壇に登場した Marceline Desbordes は忽ちのうちに〈le symbole des larmes〉〈un beau type de femme explorée〉⁽⁴⁾に祭り上げられたわけである。こういった時代背景と文学的思潮は詩人の内面に多少の影響を与えていたであろうし、それを意識していたことも否めない。彼女がエレジーの中で〈pleurer〉〈pleurs〉といった言葉を用いて描き上げた自画像は、一途の愛を捧げ、運命の前に跪く、弱く脆い女心の美しい象徴として同時代の詩人や多くの読者の心を揺り動かしたようである。Desbordes-Valmore のこの不幸な恋愛は以後彼女の詩作の主要なテーマであり続

けるわけだが、その抒情には少しずつ変化が見られる。

III-2

Ma demeure est haute,
Donnant sur les cieux ;
La lune en est l'hôte,
Pâle et sérieux :
En bas que l'on sonne,
Qu'importe aujourd'hui ?
Ce n'est plus personne,
Quand ce n'est pas lui !

Aux autres cachée,
Je brode mes fleurs ;
Sans être fâchée,
Mon âme est en pleurs :
Le ciel bleu sans voiles,
Je le vois d'ici ;
Je vois les étoiles :
Mais l'orage aussi !

Vis-à-vis la mienne
Une chaise attend :
Elle fut la sienne,
La nôtre un instant :
D'un ruban signée,
Cette chaise est là,
Toute résignée,
Comme me voilà !

(ibid., p. 448)

〈Ma Chambre〉(私の部屋)と題されたこの一篇でも「わがこころ涙にあふ

る⁽⁹⁾」と恋人に棄てられて悲歎にくれている自身の姿を描いているが、感情の限界における衝動的な「泣く」行為ではなく、魂は沈静化して、自己の内側へと流れる涙を語っている。この涙は内面に浸透し重く沈殿してゆく。

パリの貧しい屋根裏部屋の窓からは、青く澄みわたり、夜には星の輝く空が見える。しかしその空が吹き荒れる嵐にかき曇ってしまうという自然の移ろいに、詩人は自身の愛の転変を重ね合せ、絹紐でしるしのつけられた恋人の椅子に、嘗て確かに存在した幸福の幻影を追っているのだ。下で鳴るベルの音、一針一針刺していく花、空の星、目の前に在る恋人の椅子、は過ぎ去った幸わせの時を偲ぶ因であると共に、未だ捨てきれずにいる虚しい期待を象徴する。先述のエレジーに見られるような激しい「泣き」で内面が解放された結果、自己を取り戻し、心の襞に目をやるゆとり、ある種の客観性が生まれていることが明らかである。「涙を流す」と「書く」ことの間に時間と距離が置かれていると言えるであろう。

しかし《Inquiétude》（不安）において、激情に身を任せた後でこのような客観性を生じさせるに十分な素地が詩人には本来備わっていたことを知ることができる。

Mais si je crains les pleurs autant que la folie,
Où trouver la félicité ?
Et vous qui me rendiez heureuse,
Avez-vous résolu de me fuir sans retour ?
Répondez, ma raison ; incertaine et trompeuse,
M'abandonnerez-vous au pouvoir de l'Amour?...
Hélas ! voilà le nom que je tremblais d'entendre.
Mais l'effroi qu'il inspire est un effroi si doux !
Raison, vous n'avez plus de secret à m'apprendre,
Et ce nom, je le sens, m'en a dit plus que vous.

(ibid., p. 47)

恐らく恋の始まりの頃の作であろうと思われるこの詩全体を支配しているのは理性の詩人像である。抗い難い力で、愛の狂気が理性を組み伏していく過程と不安を抱きつつも理性を自らかなぐり捨てようとする心の葛藤が克明に描き出されている。「狂気や涙を恐れていては幸福を見出すことはできない。」という詩人の姿勢は挫折の後にも崩れることはなく、『鐘と涙』の結びの一節「流せ、燃ゆる涙を」という信仰に支えられた涙の肯定へと受け継がれる。

この恋愛の不成立以後、Desbordes-Valmore は、自然、幼年時代、子供、夢、神、等の事象を常に涙のフィルターを通して語ることになる。恋人に棄てられて流した涙は消えることはなく詩人の内面をあまねく覆ってしまったのである。

III-3

ところで束の間ではあったが、涙のヴェールが取り除かれた、と思われる時期があった。7才年下の俳優 Prosper Valmore と運命的な再会をし（彼女は12才の時、グアドループ島へ渡る旅費を得るためボルドーで舞台に立ったが、その時一座の俳優の子であった Prosper と出会っている）その真摯な求愛に心動かされて結婚を決意した時である。

Adieu, Muse! on me marie.
 Pour enchaîner les amours.
 Une main tendre at chérie
 M'offre de riants atours.

Adieu, Lyre, dont les charmes
 Se mêlèrent à mes pleurs ;
 L'amour, qu'attristaient mes larmes,
 T'ensevelit sous des fleurs.

Adieu, vague rêverie,
 Songe de la volupté !
 Mon âme plus attendrie
 S'ouvre à la réalité.

Vous dont je n'ai su que faire,
 Adieu, mes sombres printemps !
 Déjà, l'horizon s'éclaire ;
 L'amour paraît : quel beau temps !

(Un beau jour, ibid, p.123)

〈pleurs〉も〈larmes〉も行為の書写ではなく、過去のものとして、悲しみ、痛み、傷、嫌なことのシンボルとなって暗い過去と光り輝く今の対比を際立たせる役割を果たしている。詩の中に散りばめられている *tendre, chérie, riantes atours, fleurs* 等の幸福を象徴する言葉は涙の陰影から完全に解放されているのだ。

しかしながら、この一点の曇りもないように見える笑顔は、Desbordes-Valmore の内側から歪められる。次の詩は前掲の《ある晴れた日》と同じ頃、つまり Prosper Valmore との結婚直前の作である。

Inconstance, affreux sentiment,
 Je t'implorais, je te déteste.

...

Oui, prête à m'engager en de nouveaux liens,
 Je tremble d'être heureuse, et je verse des larmes ;
 Oui, je sens que mes pleurs avaient pour moi des charmes,
 Et que mes maux étaient mes biens.

...

Si tu veux m'égarer dans l'amour que j'inspire,
 Si tu ne veux changer ton ivresse en remords,
 Arrache donc mon âme à ses premiers transports,

A ce tourment aimé que rien ne peut décrire.
 Me sera-t-il payé, même par le bonheur ?
 Pour le goûter jamais, mon âme est trop sensible :
 Je la donne au plaisir ; une pente invincible
 La ramène vers la douleur.
 Comme un rêve mélancolique,
 Le souvenir de mes amours
 Trouble mes nuits, voile mes jours.
 Il est éteint ce feu, ce charme unique,
 Eteint par toi, cruelle ! En vain, à mes genoux,

(ibid., p. 55)

同時期に書かれたこの2篇を比較してみる時、ここにも Desbordes-Valmore 個有の詩のパターンが見られることに気付く。過度とも思える豊かな感受性のために常に情動に支配されているような印象を与えながら、ほとんど無意識的に次の瞬間には自身を対極に置いて、磁石の両極のように内面の均衡を保とうとするのである。理性と感情をはっきり対峙させるというのではなく、例えば感情の両面性といった形で詩の中に取り込んでいる。『鐘と涙』では涙がネガティブな面だけでもつものではないことを示し、恋の詩では、理性を脱ぎ捨てて愛の狂気に陥り、次いで激情の鎮静を見た。

幸福に有頂点になりながら、その渦中において自己の内奥を冷厳に、時には意地悪く見透かそうとする反動が起る。去って行った恋人とそのために引き起された苦悩、に対する執着、そして嘗て恨みにも思い、歎き続けた恋人の心変わりと同種の不実を、今新しい幸福に狂喜している自己の内に見出したのである。快びに魂を預けてみても、詩人の内の〈une pente invincible〉が結局は魂を苦悩の方へと押しやってしまう。結婚を前にして書かれたこの2つの詩の中で繰り広げられている一連の心理の動揺は、Desbordes-Valmore の苦悩と涙の対象が外在するものから内在するものへと移行してゆく新しい局面を示唆し

ている。今流している涙は自己の内側の mal (醜いもの、嫌なもの) を嘆く涙である。不実な恋人のために流させられた涙、その時身にふりかかった mal がいかにも純粹で美しいものであったと惜まれるのである。自己の内面の深淵を覗いてしまった以上、それから目を外らせて生きることはできない。他者によって与えられた苦悩ではなく、自身が加害者であり被害者であるような苦しみは救われようがなく、決して癒されることはないだろう。苦悩は曖昧さと矛盾に満ちた自身の内面に帰せられるべきものだという認識は、もう一つの beau jour, つまり恋に狂喜した時を回想する形でうたわれた詩に明示されている。

Pour me sauver, j'étais trop peu savante ;
Pour l'oublier...je suis encor vivante !

(Jour d'Orient, ibid., p.506)

恋の炎に全てを焼き尽してしまったのは自分が savante ではなかったからであるし、又恋人の記憶を消し去ることができないのは自身の執着の強さのためで、生きている限りこのような自己と共生していかなければならないのである。

IV

IV-1

逃れようのない内的苦悩を秘めて Valmore 夫人としての新しい生活を始めたのであったが、才能にも運にも恵まれなかった凡庸な夫との放浪生活、貧困、子供達の夭折、と外的苦悩からも解放されることがなかった。とりわけ、唯一の救いであり希望であった子供達の死は、死に因る喪失がいかなる期待も抱かせない絶対的なものであるために、決定的な打撃を詩人に与えたようであ

る。

Desbordes-Valmore の生涯と詩を全体的に展望すると、苦悩からの逃避の試みが更に新たな苦悩を生み出し、そこが又、現想の実現に向っての新しい逃避行の出発点になる、という連鎖的な流れが増幅されつつ形成されていくことが認められる。母の Catherine が幼い Marceline を連れて故郷のドウエを後にしたのは、革命のために零落した生活からの逃避であったが、既に述べたようにそれが娘の Marceline の苦悩の原点になった。異国で母を亡くした後、周囲の制止を振り切って、フランスへの帰国を決めたのであるが、不安と恐怖と空腹との闘いであった危険な船旅の道中、彼女が唯一心の慰めとしていたことは幸福な恋愛の夢想であったと言う。生涯彼女を悩ませた恋愛は詩人の最初の逃避であり飛翔であった筈である。結婚も出産も育児も飽くことのない幸福の追求という積極的逃避であったが、それらは悉く新たな不幸を招き、内面に集積する涙の層は厚くなるばかりであった。そして娘 Ondine の死（結婚前に Latouche との間に生れた私生児を亡くしているから、4人目の子供の死ということになる）を迎えるわけであるが、これが詩人の最後の慟哭の時である。この時期を境にして、激しい衝動的な「泣き」が直接語られることはなくなる。つまりこの苦悩から解放されるための逃避の対象をこれまでのように現実の生活の中に見出し得なかったということである。ここに至って苦悩・涙に染まってしまっている自己を知り、向きを変えて自らそれらを受容しようとする。消極的な意味あいでの放棄の「あきらめ」ではなく「明らかに見究める」ことができた「あきらめ」の状態に到達していたと考えられる。現実の生活を放棄することは決してなかったが、詩人は次第に内側の世界に浸ることが多くなっていったようである。IV-2、IV-3章では、内面化してゆく作品の中に、苦悩、涙と詩人との真のかかわりが見出される過程を見ておきたいと思う。

IV-2

実体のある幸福を追求し続けるという、苦悩からの可視的な逃避の流れの底に、現実の幸福に直接繋がるわけではないが、その代りそれが新しい苦しみを生み出すこともない内面の逃避行が認められる。幼年時代への回帰と、神の存在を拠り所とした未知の永遠の世界の夢想である。

“Vous n’imaginez pas comme c’est triste d’errer toujours. N’ayant rien de stable, rien à soi, c’est toujours vers sa ville mère que l’on se rejette...” (2 mars 1829) ;

(ibid., p. 331)

知人に宛てたこの手紙の一節は、夫の巡業地を転々とする放浪の生活が詩人にとって大きな苦痛であったこととの関連性において、故郷、幼い時代を過ごした生地が〈stable〉なもの、常に変わらぬもの、の表象であったことを示している。

Desbordes-Valmore の流す涙は喪失に因るものであったから、その反映である詩作品には「なくしたもの」「なくなったもの」に対する愛惜の思いが交錯している。故郷、厳密にはそこでの幼年時代は詩人が最初に失なったものであるが、その喪失の絶対性のために、時の経過と共に想像裡で美化作用が働いて価値が付加され、苦悩や涙の対極にあるあらゆる美しいもの、よいものを想起されるイメージで飾り立てられて、一種の理想郷と化してしまっている。

Le voilà ce beau lac dont l’eau n’est point amère ;
Ma nacelle dormeuse y flotte seule en paix !
Le voilà le doux chaume où m’enfanta ma mère,
Où cachée au malheur, je ne pleurai jamais !

. . .

O mon pays ! ton nom, qui m’offre un ciel d’azur,

Rend à mes traits souffrants le rire de l'enfance.

(La fleur du sol natal, *ibid.*, p.90)

幼年時代を過ごした生れ故郷がユートピアであったことの根拠は〈je ne pleurai jamais〉という詩句に凝集されている。〈pleurer〉の否定形が間接的に表象として用いられて、自己の内にも周囲にも確かに存在していたと憶えている原初の無垢の幸福を象徴する。〈……don't l'eau n'est point amère〉〈doux chaume〉〈un ciel d'azur〉〈le rire〉といった言葉が、〈pleurer〉に対峙する表象として、涙のフィルターを通さずに呈示され〈je ne pleurai jamais〉の一節を補強するイメージとなっている。

Qui me rendra ces jours où la vie a des ailes
Et vole, vole ainsi que l'alouette aux cieux,
Lorsque tant de clarté passe devant ses yeux,
Qu'elle tombe éblouie au fond des fleurs, de celles
Qui parfument son nid, son âme, son sommeil,
Et lustrent son plumage ardent par le soleil!

. . .

Quand l'amour de ma mère était mon avenir,
Quand on ne mourait pas encore dans ma famille,
Quand tout vivait pour moi, vaine petite fille!
Quand vivre était le ciel, ou s'en ressouvenir,

(*ibid.*, p.235)

このような故郷、幼年時代への追慕を詩人の内側から捉えるなら、それは失なった *innocence* に対する渴望に他ならない。それが、一種の美化されたノスタルジーによって昂揚され、現実の生の中で折にふれ繰り返されるのである。しかし、ここにも既に何度か触れた Desbordes-Valmore の精神の軌跡の典型が歴然と表れている。即ちこの追憶の世界に逃げ込んでしまうこと、そのため

に現実の生が詩人にとって色褪せてしまうことはないのである。〈Qui me rendra ces jours où la vie a des ailes?〉(ibid., p. 235) と問いかける詩句には《Impossible》という自身の答えと、Bernardin de Saint-Pierre のエピソード

On ne jette point l'ancre dans le fleuve de la vie. Il emporte également celui qui lutte contre son cours et celui qui s'y abandonne.

(ibid., p. 235)

が用意されていて、郷愁に溺れてしまっているのではない自己を東洋的無常感に託して語っている。又《Rêve d'une femme》(或る女の夢) では〈Veux-tu l'enfance, encore suivie/D'anges enfants pour embellir?〉〈Veux-tu remonter le bel âge/L'aile au vent comme un jeune oiseau?〉(ibid, p. 393) と次々と幼年時代への憧憬を掻き立てながら〈Et reviens, d'année en année/Au temps qui change tout en pleurs〉(ibid., p. 393) とそこへ還ることはもう一度涙の時代を生きなおすことなのだと自分に覚醒剤を与えることも忘れない。そして次の詩句では、内なる世界に籠って幼年時代の回想に浸ることが現実から遊離した逃避ではないことを、その回帰の意義を定義づけることによって示している。

Voilà le souvenir au pénétrant silence ;
 Sans philtre, sans breuvage, il endort la douleur ;
 Sur mes jours fatigués son aile se balance ;
 C'est une halte du malheur.

(ibid., p. 90)

心像として内在する幼年時代の幸福、故郷の美しい風景の中に自分を置いてみることは消極的な動機から生じる行為でありながら、実は苦悩の時を一時的

に休止させ、生活に休息を与えて、現実を生き続ける活力を与えることになるのだ、というのである。

Et me voici louant encore
 Mon seul avoir, le souvenir
 M'envolant d'aurore en aurore
 Vers l'infinissable avenir

(L'Ame errante, ibid., p. 536)

これは1853年の Ondine の死後、Desbordes-Valmore 70才前後の頃の作とされている。〈souvenir〉はもちろん、幼年時代、生れ故郷の思い出だけを指すのではなく、「涙の時代」を含めた過ぎ去った日々全てを意味する。謂わば常に失ない続けることが詩人の人生であったが、それを唯一の〈avoir〉「財産」として讃えながら更に限りない未来へと飛翔の旅を続けようと言うのである。この時既に全てを失なっているのに、詩人の目はまだ見知らぬ未来に向けて開かれている。ところで苦悩と逃避の繰り返しの中で「涙の時」とひきかえに求め続けていた Desbordes-Valmore の理想は何であったのか。恋の中に、子供達の目の輝きの奥に、彼女が求めて止まなかったものは、自己との関わりにおいて変わらないもの、何か永遠なるものであったと考えられる。実体のある対象を、も早見出せなくなってもその希いは変わらず更に限界を突き破ろうとする。

IV-3

少しずつ病に身体を蝕まれていた晩年の作品や親しい友人に宛てた書簡は、空想的、幻想的な色彩が濃く、詩人が夢の世界に浸ることが多くなっていたことを如実に物語っている。《Sanglots》（すすり泣き）では神の国と地上との間で味わう煉獄の苦しみが描かれている。Verlaine は『呪われた詩人達』にこ

の詩の全篇を引用し、「ここにきてペンは私たちの手からはたと落ち、えもいわれぬ涙が書かれた文字を濡らしてしまう。……⁽⁶⁾」と絶讃し、この詩を以てサッフォーや聖テレーズと肩を並べる唯一の女性だと彼のデボルド＝ヴァルモール論を締めくくっている。

Et de mon cœur absent qui viendra m'oppresser.

J'amasserai les pleurs sans pouvoir les verser.

Ciel! où m'en irai-je

Sans pieds pour courir?

Ciel! où frapperai-je

Sans clé pour ouvrir?

Plus de ces souvenirs qui m'emplissent de larmes,

Si vivants que toujours je vivrais de leurs charmes;

(Les sanglots, *ibid.*, p. 543)

この詩の前半にはこのような八方塞がりの不安と迷い、深い悲しみ、苦悶に閉ざされた内面の世界が描かれている。全てを剝奪された空虚な自己が「もう流すこともできずにかき寄せるだけの」涙に象徴され、生きる力になっていたのは詩人を涙に暮れさせるような思い出の魅力であったことが並置されて、もう泣くことはないが、「生きて」も「死んで」もない詩人の呻吟する声が聞こえてくる。ところが後半の詩句では、下降を続ける萎えかけた詩人の魂が再び上昇の気配を見せる。

Mais quoi, dans cette mort qui se sent expirer,

Si quelque cri lointain me disait d'espérer!

Si dans ce ciel éteint quelque étoile pâlie

Envoyait sa lueur à ma mélancolie!

...

Mais, avant de quitter les mortelles campagnes,
Nous irons appeler des âmes pour compagnes,

Au fond du champ funèbre où j'ai mis tant de fleurs,
Nous abattre aux parfums qui sont nés de mes pleurs ;

(ibid., p. 544)

魂の浄化作用を経て詩人は内面の世界で、〈éternel séjour〉、永遠を見出したのである。そこでは「私たちは私の涙から生まれた香りに浸り跳びまわる」のだ。

この「涙から生まれた香り」は、Desbordes-Valmore の珠玉の一篇として名高い《Les Roses de Sâadi》（サァディの薔薇）の薔薇の香りを想起させる。

J'ai voulu ce matin te rapporter des roses ;
Mais j'en avais tant pris dans mes ceintures closes
Que les nœuds trop serrés n'ont pu les contenir.

Les nœuds ont éclaté. Les roses envolées
Dans le vent, à la mer s'en sont toutes allées.
Elles ont suivi l'eau pour ne plus revenir.

La vague en a paru rouge et comme enflammée.
Ce soir, ma robe encore en est toute embaumée...
Respires-en sur moi l'odorant souvenir.

(ibid., p. 509)

この詩は多くの暗示を含んでいると思われいくつかの解釈を可能にしている。サァディとは、彼女が愛読していた詩集『薔薇園』の作者である13世紀のペルシアの詩人で、この作品は『薔薇園』の序文にある賢者の薔薇のエピソードから想を得たものとされている。帯に挿しすぎて海に飛び散り流れ去って

しまった薔薇の花々は、詩人が次々と求めては失なっていく幸福の断片であり、衣に漂っている移り香には、散りゆく運命にある薔薇の花が生み、散り散った後にも消えずに残っている永遠が託されている、と解釈することも可能であろう。その香りは中世の賢者の薔薇園の花々の香りに照応して、知的な美しさを漂わせている。「私の涙から生まれた香り」とはこのような香りではなかったかと思われる。

V

「泣く」「涙を流す」ことは Desbordes-Valmore にとって最も自然な情動の表現様式であり、多様な誘因を持つ苦悩に対する限界の応答であった。苦悩の書写が彼女の詩作であってみれば、「涙」という言葉が詩の中に散見するのは全く自然の所為である。泣くことは人間が自己の有限性の前で無力を知覚した時に見せる衝動の一つであるが、Desbordes-Valmore においては消極的な自己放棄に終わってしまうことはなかった。恋人に棄てられて泣く涙、放浪と貧困の生活の中で、子供達の臨終の枕元で、矛盾に満ちた自身の内奥の淵に立って流す涙は、常に自己の有限性を突き破る力を汲みとる泉となったのである。「泣く」という衝動で自己が内面的に解き放たれた結果、情動のために封じ込められていた理性が活力を与えられて自己を凝視させ、涙の関門を越す度に、少しずつ *savant* になった自己が再生される。自分は *<trop peu savante>* であったと述懐している Desbordes-Valmore は、無意識に *savante* への道を辿っていたと考えられる。これまで見てきた彼女の作品に於て *<pleurs>* *<larmes>* と、一見これに対峙しているように見える *<charme>* *<fleur>* *<parfum>* *<sourire>* 等の、幸いなるもの、美しいものの表象とのイメージの同化がしばしば起っているのは、この変化が自然に表出したものである。

このようなイメージの同化は等価物としての同化ではない。涙に対峙しているものとして捉えられていた「幸いなるもの、美しいもの」の表象例えば、恋の炎に身を焦した時の詩に見られる〈Heure d'oiseaux, de *parfum*, ……〉(ibid, p. 506) 求婚に胸踊らせる喜びの詩句〈Une main m'offre de *riants atours*〉(ibid, p. 123) 幼年時代の回想の中の〈rire〉(ibid, p. 90) は plaisir に裏打ちされた、束の間のものであった。一方〈*Beaux yeux qui pleurez l'amour*〉(ibid, p. 507) 〈……je sens que mes pleurs avaient pour moi des *charmes*〉(ibid, p. 55) そして〈*parfums* qui sont nés de mes pleurs〉(ibid, p. 544) に描かれているのは、涙を経て重厚さと永続性という価値を与えられた「美しいもの、よいもの」である。「私の涙から生まれた香り」は「私の苦悩から生まれた香り」と読み変えることができる。それは、花は散ってしまったけれど、衣と身体に移った香りは永遠のものと差し出す賢者の薔薇の香りである。「一番嫌なもの」である涙が「もしかしたら一番よいものかもしれない」というのは Desbordes-Valmore の直覚的把握であるが、そこまで詩人を導いたのは、涙の再生と浄化作用によって無意識に体得してきた *sagesse* だと解することができる。涙という表象によって Desbordes-Valmore の詩情の一つの特徴であるアンビバレンスの成立の過程が詩の中で展開され結実をみるのである。

論文の準備中に田辺保氏の「サァディのバラ」(完)が雑誌「流域」に発表された。その中から引用させていただき、本論の結びとしたい。「ヴァルモール夫人の詩は結晶したなみだそのものにほかならない。」

注

- (1) 『マラルメ・ヴェルレーヌ・ランボォ』築摩世界文学大系, p. 187
- (2) “Correspondance Intime de Marceline Desbordes-Valmore”, tome II, p. 261
- (3) JASENAS, Eliane : Marceline Desbordes-Valmore devant la critique, p. 37

- (4) *ibid.*, p. 38
- (5) 斎藤磯雄『フランス詩話』, p. 22
- (6) 『マラルメ・ヴェルレーヌ・ランボオ』 築摩世界文学体系, p. 196

文 献

Texte : Les oeuvres poétiques de Marceline Desbordes-Valmore Tome 1. II,
Presses Universitaires de Grenoble, 1973.

Ouvrages consultés :

- 1) JASENAS, Eliane : Marceline Desbordes-Valmore devant la critique,
Genève, Droz, 1962.
- 2) JASENAS, Eliane : Le poétique : Desbordes-Valmore et Nerval, J.-P.
Delarge 1975.
- 3) RIVIERE, Benjamin : Correspondance Intime de Marceline Desbordes-
Valmore, tome II, Paris, Lemerre, 1895.
- 4) BOULENGER, Jacques : Marceline Desbordes-Valmore, sa vie et son
secret, Paris Librairie Plon, 1926.
- 5) 『マラルメ・ヴェルレーヌ・ランボオ』 築摩世界文学大系 48, 築摩書房,
1974.
- 6) 斎藤磯雄 : 『フランス詩話』, 新潮社, 1957.
- 7) 「流域」(24) 青山社, 1988, 7月7日

(文学部非常勤講師)